

<エッセイ>京都のへりにて

著者	ボナン フィリップ
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	150-155
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006710

京都のへりにて

フイリップ・ボナン

朝まだき、夜明けの静かな窓を開くと町の音が聞こえてくる。すると場所の境界地の効果から何ひとつ逃れられないことに気づく。一種の生き生きとした実生活の都会的トポロジー。

日文研のキャンパスは町の南西の境界地、最近できた京都大学イノベーション・パークの背後にある。山麓のふもとにあるさほど急ではない棚地に建っている。田んぼに侵食されず、資源を利用されず、森の外れを開発されない日本の村落の伝統的な場所、里山のすぐそばにある。

最初の夜明けの音風景はちょうど版画のように前景、中景、遠い背景というように平面配置され、都市の音風景の遠近多様な配置よりもずっとすっきり感じ取ることができる。午前四時か四時半ごろには最初の夜明けの光が前景に現われ、全国三紙の新聞配達が購読者の家のとびらに配っていく音が聞こえる。バイクを止めてはふかし、数百メートル先のカーブでは速度を落として坂道の直線道を上っていく。ゆっくりと止まっては走りやがて遠くに去って沈黙を残す。

遠景には重々しくガタンガタンという雑音が聞こえる。五時ごろに郊外を走る一番電車だ。屋根を超えて、夜明けの明るさと静けさのなかを音が直線を描いて広がっていく。町の中心五条の延長にある国道九号線には、赤いランプをつけた車が連なり、近くの地域を結んでいる。消防車やパトカーや救急車のような優先車のサイレンが道路を突っ走って遠い日没に去っていく。北西に向かう道路の脇道は、建物の近景に隠されているが、想像する以上に近い。それこ

そ私たちの中心地にあることのエコーである。

時折、太陽が昇り気温が我慢できないほど上がると、鉄砲と間違えそうな爆発音が聞こえる。次に何かの爆発音かと思う。その次に麓に広がる大きな竹林に火事でも起こったかと思う。しかし実は鹿を畑から追い出すために野菜農家に取りつけた自動圧縮空気爆発装置なのだ。かつては添水唐臼が使われていた。

中景には時折、車が町内を結ぶ歩道を備えた広い環状道路を走っていく。歩道のある道路を走っていくが、生活路はもっと狭く歩道はない。環状道路にはバス停があり、町内の役に立っている。五、六本の線が最寄りの郊外駅、区役所、市民センターまで二〇分以内で結んでいる。谷の底には桂川の支流、小畑川に沿って九号線が走り、バスで京都駅まで一時間足らずで行ける。線の終点にあり、それは境界にいる特権である。早い時間にバスに乗ると席はあいているが、三つ止まるとサラリーマンやオフィスレディ、制服姿の中高生が座席を占領し、立つ人も現れる。

私たちは周辺地、つまり郊外にいます。食品が必要だが近くのスーパーマーケットになれば、中心地のどこに買いに行けばよいかを知っている。だがそれには長い道を徒歩、バス、鉄道、地下鉄で行く必要がある。都心の活気あるど真ん中にたどり着くには乗り換えがいろいろあって、どれに乗るべきかを覚えなくてはならないだろう。それは境界地に住む代価である。日常品はだんだん見当たらなくなっている。

日が昇り丘に最初の光が届く七時一五分ごろ、山にある大きなクスノキと墓地に眠っていた大きなカラスが目覚め、ガアガアとうるさく啼いてから、街に放り出されたゴミをほじくり出している。毎朝、ローラースキーをはいた男がトレーニングのためにスキーのストックを

持って舗装道路を上がり滑って下りていく。真夏になる前にセミがうるさく啼きだし、夜明けの曲を木々から奏でる。連中も街中にはめったにいなかった。重役たちは高級車のドアをばたんとしめて職場に去っていく。ふたつの世界が交差する。

そこは一五年前には存在しなかった新しい地区だ。丘の麓の坂のゆるい場所に建設されたが、市街地が広がる平地よりすこし飛び出している。その場所はやる気満々の若いエリートを喜ばせるような立地である。大きな郊外の一戸建ては二台の車庫を正面に備え、紳士向けには三〇〇馬力の四輪駆動、婦人向けには軽の車が並んでいる。これはすべて「京都プロトコル」の国で起きていることだ。私たちの同僚オーギュスタン・ベルクを心配がらせ、省察した風景の殺人が実際に起きつつあると考えられる。

街とその境界地

京都の町の歴史はよく知られている。七九四年、天武天皇が当時の中国の都、長安をモデルに条理構造で創設した。町の中心部分についてだけであてはまるが、その発展と縮小、東への移動、古代の方形構造の町の垂直的な分割、道路の格子よりもメディアに近い内部構造、家屋の道路への浸入などが知られてきた。今日では当時より広がり、かつては街を守っていた山に達している。丘は今では街区で取り囲んでいる。町は繰り返して周囲の山に達しそれを越えて、さほど高くない丘陵部には連絡道路が通じている。あたかも都市の液状のテーブルクロスが少しずつ高さを上げて溢れ出し、細かなすきまの隅々まで流れ出し、つい隣の平地の傾斜に流れ落ちていったかのようだ。

都市の街区が成長し拡大するし丘の麓にぶつかるとき、その境界地の部分で何が起きている

かをあまり描いてこなかった。ヘリで暮らし仕事をしてきたことから、京都工芸繊維大学の所在する北東部の松ヶ崎、日文研の所在する桂坂、細い白川と太い鴨川が流れる東山（一九世紀末に琵琶湖疎水が引かれた）の三つの例を挙げたい。その土木工事を扱った小さな博物館はその建設以前と以降についての貴重な図面を公開している。それぞれは都市の歴史と日本社会の一面について教えてくれる。

桂坂地区は都市計画の地区で、あるところは車道、あるところは歩道で境界地の道が作られた。しかし逆説的だが想像される以上に利用されている。住宅地区がある反対側には二六八メートルの白砂山の森にいたる坂が始まっている。そこには朝早くに鹿が啼いていたり、夕方には一群の猿が警戒の声を発している。森や竹林を登っていく小道を歩くと、環境は楽しいのだが、危険（猿、蛇、時には熊までも）に警戒するように立札が立っている。西洋ではもはや野生の自然と都市化された空間がこれほど近くぶつかってはいない。

地域の都市計画には特徴がある。ゆるやかに曲がるしつかりした道が住宅地区を横切り、その次の網目に通じているが、そこには計画はなく、いわゆるグリーンウェイになっている。たいていいつも誰もいないが公園もある。ベットの散歩をしたり子どもたちも遊びにやってくる。町内のパーティもある。

森のそばには主に学校のために教育用の観察公園も作られ、アマチュアの自然写真家が大きな鳥小屋のかげで、珍しい野鳥が池に飛んでくるのをまだかまだかと待ち構えている。つまり近くの自然のために、人はそれを保護している。自然は必ずしも善良で闊大ではない。

境界地の幾何学的な効果。あたりの空間の半分ほどには街路も都市の設備もない。人口密度は低く、あまり活動も生活もない。看護学校と学校があるぐらいだ。コンビニもない。地区の

中心、象徴的な交通のロータリーの端には郵便局、町医者、本屋さん、銀行のATMに囲まれ、中規模のスーパーマーケットが建てられている。西洋の中都市の真ん中にもっと対応するのは、このあたりに主に郊外の駅と太い主要道路があることだ。

したがってこの境界地の道路には都市的流れの横断がない。樹液は一方向にしか流れないのだろうか。排水路や灌漑路が少しあるだけで、「水路」はない。都会の組織のふたつの性格によって中距離で等間隔で網目を作り結ばれている。一方、境界地に固有の流れもある。散歩する者、多くのウォーキングやジョギングをする人が半緑地を利用して丘ぞいにいる。車両、特にタクシーが、この道で少し停車し休む以外の関心なしに止まっている（道路網では無料で駐車することはほとんど不可能だ）。しかしこの新しい地区には丘しかなく、寺社仏閣はない。それは郊外駅のさらにずっと向こうの平地にある遠くの村まで探しに行かなくてはならない。

バスを待ちながらこの平和な地区で目を閉じ、車がおだやかな速度でタイヤと車輪の音を出し、また残して通り過ぎると、田舎の町にいるような気がする。建物からの反響音も少なく、環境の静けさを感じ、臉の裏には遠い子ども時代の夏休みが浮かんでくる。

ある意味で境界地は少なくともところどころ植物環境と音響環境、動物と人間の行き来に関し入り混じっている。この先端地は野生の獣を防ぐために溝を掘り高い金網をわざわざ張っていても侵入は妨げられない。たぶん将来のひびや割れ目を見越して小さな抜け道もありそうだ。

しかし間違っただけではない。描写すること、物事と調和すること、それを感じ取ること、このように都市の感覚的風景を分析し始めることは決して現実の丸ごとコピーでもただの複製でもない。というのも都市の形といわれることは社会の組み立ての一貫性であり、住民と自然、文化と世界、この場所と都心と力の関係の投射であるからだ。この個別的な地区が置かれたこ

の場所を前からの決まりごとに則った便利な街中、歴史的な場所、新しい場所の都市活動におくことでもある。日文研は京都大学のイノベーション・センターのさらに「先端」に作られている。文字通り境界地に立てられ、それにふさわしく知識の境界地、研究の先端に位置している。

(国際日本文化研究センター元外国人研究員)

本文の完全版は以下を参照。 *Esthétiques et façons d'habiter au Japon, Maisons, villes et seuils*,

Philippe Bonnin et Jacques Pezet-Massabau, ed. du CNRS, 2017.

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）